

子どもの気持ちが汲める親に

「ママ、来るかな。ママ、来るかな。あ、来た。ママが来た。〇〇ちゃん、ほら、ママが来たよ。うれしいな。うれしいな。」

保育士のA先生は、「うれしいな。うれしいな。」を繰り返しながら、抱っこしていた〇〇ちゃんを揺するようにして強く抱きしめました。お母さんのお迎えを待ちわびて半ベそ状態に陥っていた〇〇ちゃんも、途端ににっこり。A先生の見事な演技に乗せられて、〇〇ちゃんのお母さんに対する思いは、それまでの寂しさや不安から喜びに急転換。そして、その喜びは急上昇。キャッ、キャッと、声まで発し始めました。

「今晚は。お帰りなさい。お迎え、ご苦労様です。」

「どうも。」

「さあ、〇〇ちゃん。ママがお迎えに来てくれたよ。うれしいね。忘れ物はないかな。じゃあ、明日、また元気で来てね。さようなら。」

「さようなら。」

「〇〇、行くよ。何ぐずぐずしてんの。さっさとしなさい。」

〇〇ちゃんが靴を履くのを見届けたA先生は、〇〇ちゃんの立ち上がりを追うように顔を上げました。すると、そのとき、A先生の視界に入ってきたのは、歩き始めた〇〇ちゃんと、〇〇ちゃんの3～4m先を行くお母さんの後ろ姿でした。そこには静寂あるのみ。二人は言葉を交わすこともなく、門の外へと消えていきました。A先生は、二人の後ろ姿を見送りながら、こみ上げてくる涙を抑えることができませんでした。

これは、かねてから親しくしていたある保育園の園長先生が、私に語ってくれた話です。園長先生は、この光景が脳裏に再現されたのでしょうか、話の途中から声が震えだしました。それにつられてか、聞いている私までも目頭が熱くなってきてしまいました。私の脳裏にも、私自身まるでこの場に居合わせたかのように、様子が鮮明に描かれていたのです。

園長先生と私は、思いを語り合いました。二人の思いはもちろん同じ。共感することしきりです。夜7時、〇〇ちゃんは、寂しさをこらえてお母さんのお迎えを待っていたらうに……。それを察したA先生は、お母さんのお迎えの時刻が近づいたとき、〇〇ちゃんの期待をふくらめ喜びを大きくしてあげようと、一緒になって喜んであげたのに……。5秒でもいい、3秒でもいい、なぜ抱きしめてあげないのか……。なぜ一言「〇〇ちゃん、えらかったね。」と、声をかけてあげないのか……。〇〇ちゃんの寂しさは、お母さんの5秒、3秒の抱きしめで救われるのに……。〇〇ちゃんの頑張り、お母さんの一言で報われるのに……。本当にわが子が好きならば、本当にわが子をいとおしいと思うなら、たとえどんなに疲れていても、仕事が終わればいち早く自分を待っているわが子のもとへ飛んでいき、声をかけたくなるだろうに……。抱きしめたくもなるだろうに……。

子どもの気持ちが汲める親——それは、子どもたちが最も強く求めているものは、自分を受けとめ包んでくれるお父さんとお母さんだと知っている人なのです。子どものころの自分を思い起こし、そのときの思いをわが子に重ね合わせることでできる人なのです。

(平成18年9月)

抱っこすることをいとわない

9月25日、各紙は一斉に北海道札幌市の幼児虐待死事件を報じました。犠牲になったのは、4歳、3歳の幼い姉妹で、死に至らしめた男は、しついで暴行したら死んでしまったと供述しているようです。詳細については何も分かりませんが、二人とも顔や体に数箇所ずつ殴られた痕があったと記されています。4歳、3歳というと、うちの園児たちと同じ年。もうかわいそうでかわいそうで、かける言葉も見つかりません。この子たちは、果たして、どれくらい親に甘えることができたのでしょうか。どれくらい時間、親の胸で眠ることができたのでしょうか。

二学期最初の日、赤組さん（年少児クラス）の〇〇ちゃんは、お母さんに手を引かれてやってきました。「〇〇ちゃん、おはよう。」そう言いながら、私はしゃがんで、いつものように両手を差し出し、〇〇ちゃんを迎え入れようとしていました。ところが、今日は違います。いつもはにこにこしながら私の胸に飛び込んでくる〇〇ちゃんが、今日はお母さんにしがみつきます。見ると、目の周りが濡れています。状況を察知した私は、さっと手を引っ込め、こう言いました。「〇〇ちゃん、うれしいね。お母さんと一緒。お母さん、お部屋まで来てくれるよ。お母さん、どうぞごゆっくり。」

同じく赤組の△△ちゃん。△△ちゃんは、いつもと変わらぬ笑顔で幼稚園にやってきました。お母さんの笑顔も変わりません。お母さんは、いつものように△△ちゃんを靴箱のところまで送り届けました。そして、また、いつものように引き返そうとしていました。そのときです。△△ちゃんはさっとお母さんの袖をつかみました。「あれ、どうした。お部屋に行かなくっちゃ。」そう言ってお母さんは、△△ちゃんの手を自分の袖から離そうとしていました。その途端、△△ちゃんは堰を切ったかのように泣き出しました。突然の困惑に覆われたお母さん、笑顔はとっくに消し飛んでいました。「お母さん、お部屋までついていてください。お時間が許すようなら、△△ちゃんがもういいよと言うまで一緒にいてあげてください。」私はそう言ってお母さんをお部屋の方へ促しました。それからどのくらい経ったのでしょうか。お母さんは、にこやかな表情で門を出て行きました。二学期が始まって週間くらい経ったある朝のことでした。

白組さん（年中児のクラス）の◇◇ちゃんは、門の直前で門をくぐるのを拒みました。お母さんは◇◇ちゃんの背中を押しますが、◇◇ちゃんは足を踏ん張って、お母さんの押しに逆らいます。いつものにこにこ◇◇ちゃんとは大違い。目には涙を浮かべています。聞くと、バスより先に園に着くんだと、家から頑張って歩いてきたが、もう一步というところでバスに追い越されてしまったので、悔しくて泣き出してしまったとのこと。その悔しさのぶつけ場所がお母さんだったのです。

〇〇ちゃんにしても、△△ちゃんにしても、◇◇ちゃんにしても、大人からすればどれもたわいのない涙のように見えます。しかし、当の本人たちにしてみれば、襲い来る不安や挫折にも似た悔しさに起因する真剣かつ必死の涙なのです。子どもたちは、まだ生まれて3年、4年、5年しか経っていません。時にどうしようもない心細さに襲われます。そして、その心細さに打ち勝つことができないから、しがみついて泣くのです。

抱きしめてあげてください。抱っこしてあげてください。やがて子どもたちは安心を取り戻し、地に下りたいと訴え始めます。地に下りた子どもたちは、自ら親元を走り去ります。安心が小さな自信を生み、その自信がそうさせるのです。そして、しばらくして、また心細げに戻ってきます。そしたら、また抱っこしてあげてください。抱っこされることによって安心というエネルギーを補給した子どもたちは、再び走り出します。こうして子どもは成長していくのです。

楽しませてあげる親から自分も一緒に楽しむ親に

終日雲一つなく、真っ青に晴れわたった空。これぞ青空。これぞ秋空。天高くとはこういう空をいう。そんな空の下で行われた今年の運動会。子どもたちは存分に自分を出し、空のお日様のように輝きました。そんな子どもたちの姿を夢中になって追い続けるお母さんたち、そして、お父さんたち。お母さんたち、お父さんたちの目は、子どもたち以上に輝いていました。子どもたちが踏みしめ、駆け跳ね、舞うグラウンドには、子どもたちの充足感もさることながら、お母さんたち、お父さんたちの充足感も満ち満ちていました。

お母さんたちの充足感といえば、未就園児親子種目の「握手でこんにちは」におけるお母さんの身振り手振りの中に、そして、在園児親子による「友達賛歌」におけるお母さん、お父さんのダンスの中に、ひととき大きく漂っていたように思います。

わが子と一緒に「握手でこんにちは」を踊っているお母さんの顔は、どの顔も一様に微笑んでいます。それは、わが子がかわいくてたまらない、わが子の身振り手振りの一つ一つがいとおしくてたまらないといった顔です。そんなお母さんに誘われてか、子どもたちもみんなにこにこ顔です。そのにこにこ顔が、またお母さんの笑顔を誘います。これはもう、子どもを楽しませてあげるお母さんの域をとっくに超えています。お母さん自身も子どもに負けじと、自ら踊りを楽しんでいます。私はそんなお母さんが大好きです。そんなお母さんを見ると、私自身うれしくなってしまう。子どももきっと同じでしょう。お母さんの楽しそうな顔は、子どもにとっても最高にうれしいプレゼントです。

在園児親子の「友達賛歌」におけるお母さん、お父さんも同じです。「一人と一人が腕組めば、……」とうれしそうに踊っている親子の姿は、見る人に幸せ感を提供します。そのとき、子ども以上に軽やかにステップを踏むお母さん、お父さんの姿は、幸せ感に加えて見る人を躍動美の世界へと誘（いざな）います。もちろん子どもは、お母さん、お父さんが自分を受けとめ一緒に踊ってくれることに、大きな喜びを抱きます。その子どもの笑顔を見て、お母さん、お父さんの足取りは、軽さに拍車がかかります。ここでもお母さんたちは、子どもと一緒に自らも楽しんでいるのです。

話を、子どもにとっていちばん身近なお母さんに絞ってみましょう。子どもは、自分の目を見てちゃんと話を聞いてくれるお母さんが大好きです。一緒に遊んでくれ、遊びを一緒に楽しんでくれるお母さんが大好きです。つまり、自分を受けとめ包んでくれるお母さんを求めているのです。このようなお母さんの下では、子どもは安心感に浸れます。心が安らぎ、やがて自ら行動を起こす（自立の促進）ためのエネルギーを蓄えます。

世の中のお母さん方が、みんなこのようなお母さんだったとしたらどうでしょう。子どもたちの自立のためのエネルギーはどんどん満たされていって、あちこちで「満タン」の声が上がるでしょう。子どもたちは自分自身が充足するだけでなく、充足の喜びをお母さんにも分け与え、お母さんにもエネルギーを生ませるでしょう。「握手でこんにちは」や「友達賛歌」を踊っていたお母さんたちの姿は、まさに子どもたちに活力を生ませ、結果として自分自身も活力を生むお母さんの姿だったのです。

運動会の代休も過ぎ、続いての子育てフェアも終わって、子どもたちが久々に登園してきた10月12日の朝、一人のお母さんがおっしゃいました。「『かぶいて踊ろう』（年長さんの踊りの題名）を踊っている朝比奈先生の踊りに見とれてしまいました。本当に上手なんだもの。」お母さんたちと同じようにここにも、豆絞りが外れ落ちてしまっても夢中になって踊っている子どもたちの姿に、自分自身一層燃え上がった教師が一人いたのです。

お部屋、暑すぎませんか。

「わあ、暑い。いったい何度あるの。」

居間に通された瞬間、暖気に包まれた私は、思わず温度計を探しました。今まで外にいて外気に接していたため、余計にそう感じたのかもしれませんが、それにしても暑い。暖かいという状態はどうに超えていますか。

その日はまさしく小春日と呼ぶにふさわしい日で、朝から風もなく日差しはやわらかで、陽だまりで花の手入れなどしていたら汗ばむような、そんな陽気でした。

温度計は壁の隅に掛かっていました。見ると、22度。居間では、4歳になる男の子がプラレールで無心に遊んでいました。が、顔は真っ赤。着ているベージュのジャンパーが、丸く膨らんで見えました。

男の子は、線路を継ぎ足そうとして、走らせていた列車のスイッチを切りました。その途端、部屋には静寂が訪れました。そのときです。私の耳に小さな機械音が飛び込んできました。エアコンの音です。外の日の光が部屋の中まで暖かくしていたのかと思いきや、この暑さはエアコンのせいだったのです。改めて目を南に転ずれば、居間は玄関のそのまた奥。日の光は、ここまでは届いてはいませんでした。

かつて「文明とは、便利さ、都合のよさの生み出しで、人間は手を抜き楽をするもの」「文化とは、手を加えて作り出すことで、人間が創造の喜びや生きがいを感じるもの」と聞いたことがあります。私たちは、これまで、寒ければ着て寒さを和らげるという方法をとってきました。また、体を動かして暖をとるといふこともしてきました。これは、まさに文化です。着る、動くという自分自身の働きかけによる、いうなれば建設的生産的行為を通して、自分で自分の暖をつくり出してきたのです。

これに対して、エアコンは、機械が暖を供給します。スイッチこそ自分の手で入れますが、後は機械が暖を生み出し、送り届けます。ですから、エアコンは労苦を伴いません。人は、労苦を伴わないまま快適さを得られます。いわば文明です。

この労苦を伴わない快適さの獲得が、今やあまりにも多く人々の生活を支配しています。電気による照明ばかり、電子レンジによる加熱即席食品ばかり、ちょっとそこまでの自動車ばかり。そして、その快適さは、いつの間にか慢性化し、過剰供給をもたらします。その一例が、冒頭の暖房です。

快適さの慢性化、供給過剰は、やがて人々の快適さを感受する感覚を麻痺させます。それは、同時に、恩恵に対する感謝感覚も麻痺させます。感性、心情の退化した機械人間の誕生です。

お子さんは、今、この感性心情退化症状を呈してはいませんか。それより何より、お父さんお母さんご自身が、感性心情退化人間と化してはいませんか。朝の冷気の中を行き交う「おはよう」に人のぬくもりを感じたり、店頭に並ぶ真白な大根に、手を赤くして土を洗い流している農家の人の顔を思い浮かべたりするような感覚など、とうに忘れてはいませんか。

寒かったら、まずは着て寒さを和らげましょう。おいしい味噌汁を飲みたかったら、自分自身で味噌やだしを調合しましょう。自分で手がけて暖をつくり、自分で手がけて味を生む。わが子を、主体的能動的に立ち向かう子に育てたいのなら、まずは親自身が自らの生活態度、生活習慣を改めていかなくてはなりません。「親が変われば子が変わる」— 子育ての不易な指針といえましょう。

まんざらでもない自分 —— 自己肯定感の醸成

新しい年が明け、精華幼稚園は52回目の新年を迎えました。今年も子どもたちの豊かな育ちを願い、新たな気持ちで保育を展開していきたいと思います。本年もご支援のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

ところで、昨年は、暗く悲しいニュースの多い1年でありました。悲惨な飲酒死亡事故、火災、県の首長を巻き込んだ談合等数々ありましたが、中でもわが子を前にして無関心でいられないのが、中学生の自殺事件でしょう。報道されるたびに、多くの人たちが、なぜ、どうして、と声を上げ、死に追いやった人たちを憎む前に、救えなかったことに悲しさを、手を差し伸べられなかったことに悔しさを募らせたことでしょうか。私の場合など、立場上これまで多くの子どもたちとかかわってきたせいか、面識もないのに当の子どもたちの顔が目には浮かぶようで、何とも言いようのない虚しさに包まれたものでした。そして、同時に、この子たちの後ろにいる親御さんたちの心を思わずにはいられませんでした。ご家族の方々にとっては、このお正月はお正月ではなかったことでしょうか。

私は、この子たちの冥福を祈りつつ、この子たちの死を無駄にしないためにも、うちの園児たちにとってこれから必要な指導はどうあったらいいかを考えました。行き着いたのは自己肯定感の醸成です。

当の子どもたちは、体こそ大人と違わなくても、物心ついてからまだ十余年しか経っていません。したがって、自分に対する目、周囲の人たちに対する目は、私たちのようには幅を有しません。自己がある程度確立されている私たちなら、あの人はああ言うけど私には私なりの考えもあるんだからと、安易に人に流されることが少なくなります。しかし、自分がまだ十分育っていない彼らは、自分自身に頼り切れず、したがって、他人の声を強く受け止めてしまいます。自分自身が虚弱なため、他人の声を聞いて思い込んだ思いは、私たちの想像をはるかに超える強いものとなっていきます。見方によれば純粋です。一途です。ですから、一度思い込んだ思いを覆すには、その思いの強さを上回る納得が必要になります。

ところが、崖っぷちの心境に至っている人間の思いを覆す強い納得など、そう簡単に用意できるものではありません。自分などいなくてもいいんだ、自分は必要ない人間なんだという自己否定の思いの方がはるかに上回り、自分で自分にかかる自己暗示の強さが加速します。

それを未然に防ぐのが、幼少時からの自己肯定感の醸成だと考えます。「僕って、結構いいじゃない。」「私って、まんざらでもないわ。」「僕は僕でいいんだ。」「私は私が好きなの。」こんなふうに分を見つめられる、こんなふうに分を受けとめられる、そんな子どもたちであったなら、子どもたちは、崖っぷちに立つことはないでしょう。

この際、もう一度わが子への対し方を見つめ直してみたいかがでしよう。もちろん、いけないことはいけない、心がけなければならぬことは心がけなければならぬと、人の道を論ずことは大前提ですが、その上で、親自身がわが子を好きになり、わが子を人として認め受けとめ抱きしめる、そんな対し方を今一度意識化してみたいとお勧めします。いわゆる親自身のわが子に対する肯定感の醸成です。お前はいい子だ、お前は素敵だ、お前はそれでいいんだというわが子に対する肯定的な受けとめは、子どもに間違いなく自尊感情を芽生えさせます。芽生えた自尊感情は、自分の中にまんざらでもない自分を発見させ、自分への自信を増大させていきます。

(平成19年1月)